

超高齢社会

～ 私たちに及ぼす影響とは～

平成30年度 3年3組(36)

宮嶋 優海

指導 医学部看護学科

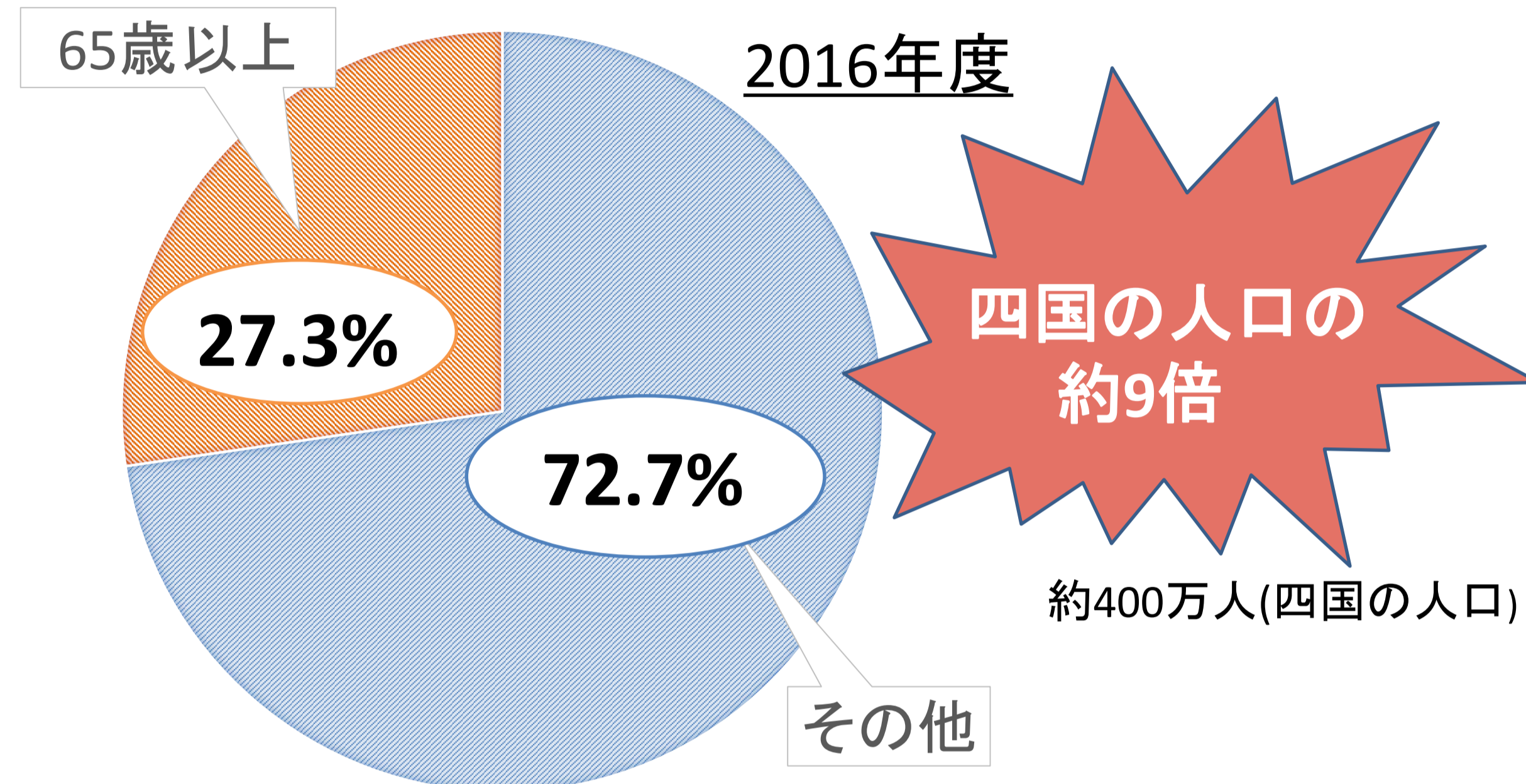
谷向 知

研究目的

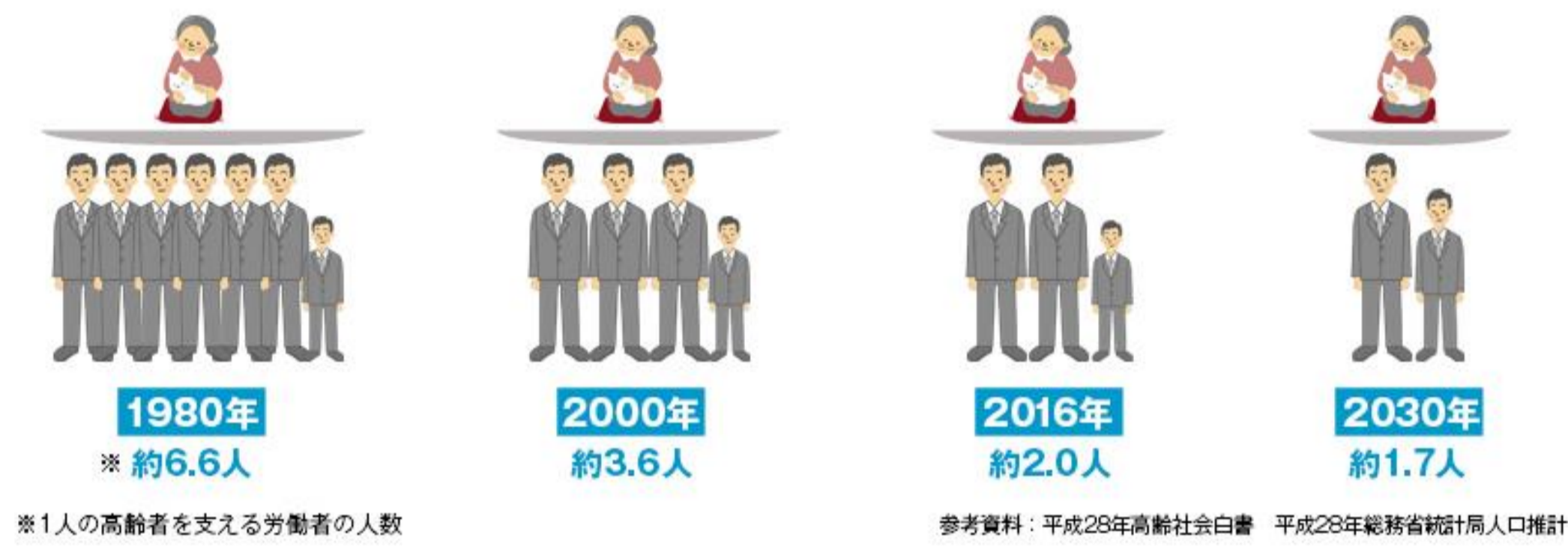
現在の日本の重要な問題となっている高齢化。
 ニュースや授業でよく耳にする言葉ではあるが高校生には現実味がなく、分かりづらい
 そこで...
 ⇒周囲の理解を深め、説明できるようにする
 ⇒問題を知り、今後の解決策を自分なりに考える

高齢化の現状

現在の65歳以上の人口は**3641万人**
 総人口を占める割合は**27.3%**



●労働人口(20歳～64歳)に対する高齢者(65歳以上)の比率



介護問題について

【都市部の介護難民が増える】
 減らすための政策

CCRC(Continuing Care Retirement Community)

1970年代のアメリカで始まった考え方。
 高齢者が健康なうちに入居し、継続的なケアの提供によって、生涯を過ごすことのできる共同体

介護難民とは...

要介護者認定を受けているにも関わらず、施設に入所できないだけでなく、家庭においても適切な介護サービスを受けられない65歳以上の高齢者

2025年には全国で約43万人にも上ると言われている

日本では「生涯活躍のまち」と名付けて地方創生の一環として行われている

メリット

- ・健康な状態で移り住む
- ・様々な世代との交流・共働する機会が増える
- ・予防医療や健康支援についてのサービスの提供

- ⇒仕事や社会活動、生涯学習に参加できるチャンスが十分にある
- ⇒健康寿命の延伸
- ⇒地域社会への参加が、無理なくできるような受け皿がある

デメリット

- ・住居の戸数に限界がある
 - ・首都圏から高齢者が大挙移住
 - ・趣味も特になく、誇れる経験も専門性も特になくという場合
- ⇒地域の高齢者が入所できないという状況に...
 ⇒地域社会との接点を見出しにくい



アンケート対象・方法

対象:愛媛大学附属高校1. 2.3年生

方法:アンケート用紙を配布し、以下の質問に記述で回答してもらった

質問1 日本の高齢化問題について思いつくもの

質問2 学生たちにどのように影響すると考えるか

結果:質問1

社会保障費の増加・年金・介護・選挙の政策・労働年齢人口の減少・過疎化・後継者不足・孤独死・事故が増える

質問2

年金額の減少・福祉の質の低下・地域の過疎化・伝統文化の継承・農業人口の減少・働き世代の負担増加・若者の意見が通りにくい・介護施設や介護士が今以上に必要になる・自分達に影響はない・未来に希望を感じることができない

年金問題について

【もらえる年金額が減る】

100兆円もの年金原資を切り崩しながら運営されているというのが今の現状。
 将来的に、2030年代には年金原資が枯渇し、高齢者に年金が支払われなくなる可能性がある

⇒年金原資が枯渇する前に何とかして年金問題を解決する方向に持っていかないと制度が危ない！！

今の年金制度は賦課(ふか)方式(現役世代が現在支払っている年金保険料を、現在年金を受給している高齢者に対して年金給付する)というもの

※問題点

少子高齢化社会が進むにつれて現役世代の保険料負担が重くなる

政策

積立方式(自分が納めた年金保険料を自分がもらう)に制度を変えていく

- ⇒人口構成にかかわらず、自分が支払った年金保険料は、自分が必ず受け取ることができる
- ⇒高齢者と若者の支給と負担のアンバランス感の解消

《積立方式への移行により想定される問題》

「二重の負担」

- 賦課方式から積立方式に移行する期間の現役世代
- ・自らの老後のための積立「負担」
- ・老齢世代を支える「負担」

解決案

☆移行期の年金財源を
 国債を発行して一時的に賄う方法

移行期の現役世代だけでなく、将来世代(場合によっては老齢世代)も含め、長い時間をかけて償却していく



私たちにできること

- ・高齢化問題に興味を持ち、様々な自治体の政策を知る
- ・これからの課題を見つけ、解決策を考える

まとめ

今日の日本では超高齢社会であり、目を背けられない問題が山ほどある。
私たち高校生も無関係ではない。
 自分の気になる話題からでも調べ、考えるといった関心を持つ必要がある。

将来誰もが住みやすい街を作るためにも、正しい知識を身につけ、まずは行動を起こしてみてください。

参考文献

- <http://firstcollege.jp/measures-to-lower-the-aging-population>
- <https://www.minnanokaigo.com/news/kaigogaku/>

謝辞

この研究の準備・指導をしてくださった愛媛大学医学部の谷向知先生、課題研究のための授業や日程を考えてくださった辰野先生、本当にありがとうございました。